The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	法隆寺金堂壁画「山中羅漢図(3号,7号小壁上)」の原寸復元イメージ画の提案
Author(s)	松田, 真平
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 192-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

法隆寺金堂壁画「山中羅漢図（3号，7号小壁上）」の原寸復元イメージ画の提案

松田真平／東大阪大学短期大学部非常勤講師・㈱ICD現代デザイン研究所内－文化財研究室

はじめに

奈良の法隆寺金堂旧壁画「伝・山中羅漢図」（禅定比丘〔びく〕列図）は，7世紀後半の現在の金堂建立時に内部の外陣頭貫上の小壁18面に描かれたと考えられている壁画で，山中で樹木や岩山の下に座して禅定する修行僧（比丘）計28人が描き列ねられたものであった（昭和24年焼失）。現在，模写・写真等で3種の絵柄の概容が知られている。

どの壁画も比丘の傍らの木に頭陀袋（鞄）が懸けられており，中国・雲岡7洞の浮彫りにもこれと近い図様があり，中国風の表現である。筆者は，この優れた壁画を全て火災前の原色原寸で，壁の質感も併せてよみがえらせることができれば，という強い願いから，カラーＣＧによる復元イメージ画の研究制作を試みた。本発表ではカラー図を展示したが，構図がより見やすい骨描きをここに掲げる。

「禅定比丘図像」の定義

「禅定」とは，仏教出家者（修行僧＝比丘《梵語 bhiku の音写》）が，ごく一般に行う座禅瞑想のことである。図像的には「修行比丘像」（座して修行する様子を表すもの），「禅定比丘像」（修行する姿で結跏趺坐したり禅定印を結ぶもの），「禅観比丘像」（観想の対象が比丘の傍らに表されているもの）の3種に分類される。

法隆寺のこれらの図様のルーツは，中央アジア・クチャのキジル石窟やクムトラ石窟，トルファンのトユク石窟などに求められる。

法隆寺のものは，観想の対象が比丘の傍らに表されていないため，「禅定比丘像」もしくは「修行比丘像」に分類できる。

この壁画は何を表現したものか

聖徳太子が説かれた「三宝」の一つの「僧」と，「繰り返されるべき日々の修行」を重要視する当時の信仰の在り方が，金堂内にこのような絵が描かれた要因であろう。

図様と関連する経典

中央アジア・クチャ出身の鳩摩羅什訳の「妙法蓮華経」27巻・「座禅三昧経」，「禅法要解」・「禅秘要法経」，「弥勒経」および弥勒関係の「観仏三昧海経」などに禅定比丘に関係する記述が多く見られる。

3号小壁上の図様の考察（図1）

この禅定比丘像は「覆頭衣」で，須藤

図1　3号壁上復元イメージ画：鉄線描風に描線を修正した骨描き（筆者による研究作品）

(1989) によると，この服制は中央アジアに見られず，雲岡および敦煌に多く見られ，中国の北魏以前の河西にそのルーツが求められるという。

図中で比丘は正面向きに座り，画面右に樹木が描かれ，そこに鞄が掛る。背後の描線が楕円形の仏龕風にくり抜かれた岩の表現であることが，詳細な観察により確認できたが，修行する場所の光景をあらわしたものと考えられ，特別な高僧の頭光などを表す表現は見られない。

今回の研究制作では，明治時代の桜井香雲の模写（東博蔵）と，昭和初期便利堂撮影の堂内モノクロ写真資料を参考に，描線は他壁を参考に鉄線描風に全て修正し，桜井氏の描線のイメージを完全に払拭するよう心掛けた。これは，次に述べる７号小壁上のものに関しても同じである。剥落の激しい部分は図柄の意味がわかる程度に節度を保って復元を試みた。色彩については１号壁上の模写（法隆寺蔵）を参考にした。

新知見として，「右下の一番右端にも，山と樹木の幹の形が存在していること」（図１－注１）が挙げられる。これは桜井氏の模写には全く描かれていないが，写真と丁寧に照合する作業により確認できたものである。

７号小壁上の図様の考察（図２）

この禅定比丘像は樹下に座して，右手を拳状に挙げており，敷物はなく，地の草の上に直接座している表現である。「修行に勤しむ意志的な比丘の表現」を画家が表現しようとしたものであろう。比丘の頭上に大きく枝を張り出した樹木が描かれる構図は，中国のルーツで，中央アジアではないと推測されている（須藤，1989）。

遠景は，金堂から見える信貴山の概形を基本にして，全体の構図が考案された可能性が極めて高いことを１昨年11月の本会大会で発表した。その後，昭和初期便利堂撮影の金堂内部写真で，この壁画の上半分が小さく捉えられたものを法隆寺の許可を得て入手し，明治時代の桜井香雲の模写（東博蔵）と併せて精査した。比丘座像の後方に写実的に大きく描かれた樹木について，この復元イメージの枝と葉は，白っぽい剥落跡と黒っぽい剥落跡の形を総合的に考察し，不自然でない形を注意深く抽出して復元を試みた。その結果この樹木は，「現実に目の前にある樹を写生したあと，絵画的・宗教的ニュアンスを加えてアレンジされたもの」と推測することができたが，最も近いのはおそらく境内付近に当時から生えていた「クスノキ」と「楢（コナラ）」の幹と葉で，それらのスケッチからの合成的な創造であろう。なお，山の背景の稜線の樹木列は信貴山や二上山にも多く生育する針葉樹「アカマツ」にならったものと考えられる。

（参考資料：須藤弘敏「禅定比丘図像と敦煌285窟」『仏教芸術183号』1989年，便利堂「法隆寺金堂壁画集」1951年，講談社）

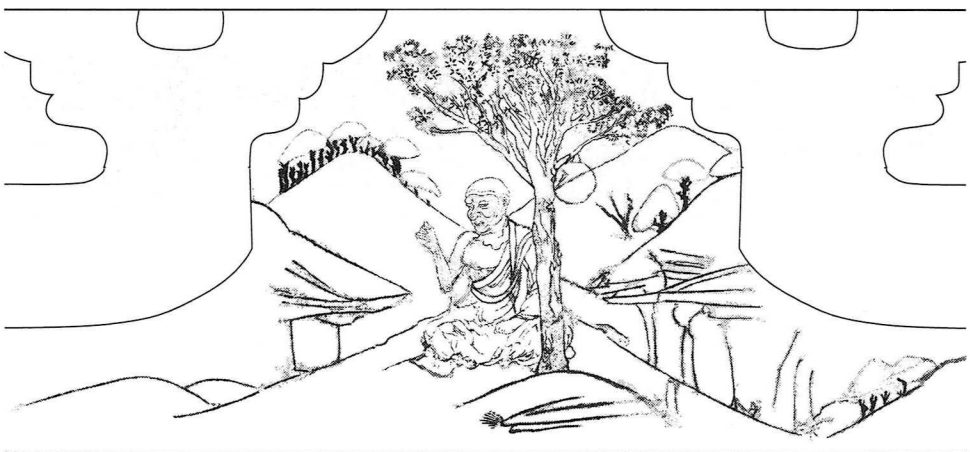

図２　７号壁上復元イメージ画：鉄線描風に描線を修正した骨描き（筆者による研究作品）